

「華夏と夷狄」から「中国と西洋」へ：

19 世紀前期における中国の西洋に関する論述パラダイムと情報戦略

呉 義雄 (中山大学)

【発表要旨】

中国の学界では、近代以前中国人が欧米を「夷狄」と見なしていたが、アヘン戦争以降改めて「西洋」と認識するようになったことについての論述が多く見られる。それらの中で、その多くは大きな視点から思想史の変遷を描いたが、その過程の中で中国と西洋との間の具体的な動き、またそれに伴う観念の変遷などを見落とした。アヘン戦争以前、清朝の「天下」観念の中で、西洋国家は「夷」にあたる存在である。このような認識は、清朝が欧米諸国を「互市国」とする政治哲学の基礎である。「朝貢国」と異なり、西洋人は自らの身分を「夷」と認定されたことに同意せず、「互市」が清朝の恩恵とも思わず、さらにそのような身分認識を貿易の発展の障害物と見なしていた。そのような認識の差異は、19 世紀 10 年代から 30 年代にかけての中英の間における対抗の観念的な底流をなしていた。清朝はそれらの対抗を通して「天下」観念を改正する必要性を認識していなかった。19 世紀後半に至っても、「天下一道」や「夷夏の弁^{わきまえ}」などの観念は依然として繰り返して論述されていた。その一方、欧米は 1830 年代という特定の時代背景のもとで、中西の付き合いにおける観念認識を変えようと決心した。それに伴い、彼らは、中国と西洋との文明地位に関する論述の構造を作り上げて、さらに二回のアヘン戦争を通して中国と西洋との関係における清朝の発言権を否定した。その同時に、アヘン戦争以降、「外夷」に代わって、「西国」は次第に清朝が欧米諸国を描き述べる際に用いられる概念となり、その後「西方」(西洋)へと変わるようになった。「中西」(中国と西洋)という表現方式は流行ってゆき、「天下一道」の思想が破られ、「道分為二」(道が二つに分かれること)が必然的な結果となった。

【略歴】

呉 義雄/Wu Yixiong (中山大学歴史学教授)

中国安徽省桐城県出身、1962 年生まれ。1983 年に安徽大学で学士学位を、1986 年に復旦大学で修士学位を、1999 年に中山大学で博士学位を取得。1986 年より中山大学歴史学科で教鞭を執りはじめ、現在は歴史学部教授。広東省歴史学会副会長、広東省宗教学会副会などを兼任。専門分野は中国近代史、近年主に近代中外関係史、中国と西洋文化交流史を研究し、多数の学術研究プロジェクトを立ち上げてきた。主要な著書に、『宗教と世俗の間 華南海岸における基督教プロテスタント宣教師の初期活動に関する研究』(2000 年)、『条約口岸体制の醸成：19 世紀 30 年代の中英関係に関する研究』(2009 年)、『開始と進展：華南基督教史論集』(2010 年)、『中国における英語新聞と近代早期の中国と西洋との関係』(2012 年)、『大変局の中での異文化の出会い：清末における中国と西洋との交流史論』などがあり、学術論文を 60 余篇発表。学術会議を多数主催し、アメリカ・ヨーロッパ・日本・香港・マカオ・台湾で訪問研究などの学術交流活動に参加、「全国大学人文社会科学優秀成果賞」などを受賞。